

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	範麗雅『中国芸術というユートピア—ロンドン国際展から アメリカの林語堂へ—』
Author(s)	唐, 熠東
Citation	アジア社会文化研究 , 25 : 171 - 177
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55241
URL	https://doi.org/10.15027/55241
Right	
Relation	



書評

範麗雅『中国芸術というユートピア—ロンドン国際展から アメリカの林語堂へ—』

唐 燿東

1. はじめに

本書は、2018年に名古屋大学出版会によって出版された学術的な著作である。注、付録と参考文献などの部分を加え全体として590頁の分厚い本である。本書の構成は全三部（10章）から成り、第Ⅰ部（1—3章）は「ロンドン国際展と「中国芸術」、第Ⅱ部（4—6章）は「ロンドン国際展と近代中国知識人」、第Ⅲ部（7—10章）は「林語堂の「中国」とパール・バック夫妻」である。

毎章のタイトルは以下の通りである。序章「中国芸術というユートピア」、1、「ロンドン国際展と「中国芸術」へのアプローチ」、2、「二人の英国人東洋学者」、3、「西洋の眼」と「日本の眼」、まとめ「英国知識人の中国文理解とその盲点」、4、「ロンドン国際展と中国人外交官」、5、「ロンドン国際展と英国の中国文化人」、6、「ロンドン国際展と中国の知識界」、まとめ「ロンドンからニューヨークへ」、7、「渡米前の林語堂とバック夫妻」、8、「渡米後の林語堂とバック夫妻」、9、「林語堂における性霊・ユーモア・閑適」、終章「失われた楽園」を超えて。

本書は「あとがき」によれば2016年に著者が東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻に提出した博士学位論文に基づいている。同博士論文の題目は「南京国民政府の文化外交と『中国評論週報』グループ知識人の英文執筆活動——「ロンドンにおける中国芸術国際展覧会」（1935—36）の開催をめぐる」である。そして、本書の執筆の動機について著者は、最初の計画は林語堂の作品研究という小さなテーマを考えていたが、実際に調査・執筆して

いくつか、林語堂などの中国知識人をこの時期の英語圏の読書界が歓迎した背景を新たに発見し、テーマが広がっていったと述べている。著者は、1931年の「満州事変」を契機として南京国民政府が中国の芸術文化を積極的に欧米社会に向けて輸出することを強調しつつ、ロンドン国際展の開催をきっかけとして欧米の知識人読者層の間に中国の伝統文化に対する高い関心が生じた事実も検証している。また、林語堂を代表としての中国知識人とロンドン国際展の関連性にも言及している。著者は1935年ロンドンで開催された中国芸術国際展覧会の重要性に注目し、本書のサブタイトルを「ロンドン国際展からアメリカ的林語堂へ」としている。

2. 本書の概要

本書の第I部では、著者は『タイムズ』や『バーリントン・マガジン』をはじめとする英国の主要な新聞や東洋学の専門誌に掲載された文章を資料として、1935年のロンドン国際展の開催と展示された中国芸術との関係を明らかにした。1930年代のヨーロッパで中国芸術文化への関心が再燃したことの要因は多様だが、その要因の一つは1931年の「満州事変」を契機として、南京国民政府が国際社会に向かって援助と理解を求めるために、ロンドン国際展を通して中国の伝統的な文化や思想を積極的に欧米へ広めるという文化外交の政策をとったことであるとされる。また、ロンドン国際展前後における欧米社会の中国の芸術に対する理解の変化を明確に説明するために、著者は19世紀末からロンドン国際展前までの中国の書画に関する収集、展示、研究の歴史を整理している。著者によればロンドン国際展の成果の一つは、特に18世紀以降の英国人に、陶磁器、織物と同様に中国の日常品の一つとみなされてきた中国絵画が、芸術としての価値を認められるようになったことである。

また、著者は東西芸術における鑑賞方法、技法と芸術理念の相違について紹介を行っている。中国伝統の文人画の鑑賞方法は、「把玩」という手触りによる近距離の鑑賞法である。それに対して、西洋の絵画が教会や宮殿など巨大な室内空間に飾られ、人々は自然と遠距離から鑑賞することになる。西洋での絵画と文字は相対的に独立した概念と捉えられているのに対して、中

国書画の特徴は、書と絵の一体性を強調することである。西洋絵画の創作法の「写実」と區別して、中国絵画の創作法は「写意」と名づけられている。その意味は著者によれば「必ずしもその外形の忠実な再現を求めるのではなく、むしろ芸術家の精神性の表現をより重視する技法・理念である」(38頁)。さらに、著者は、19世紀以降の西洋芸術の文脈における中国書画の受容について検討する過程で、ロンドン国際展の開催に大きく貢献したローレンス・ビニヨンとアーサー・ウェイリーの存在を見出している。

中国では1900年の「義和団の乱」と1911年の辛亥革命の発生に際して、絵画を含む大量の文物が日本や欧米に流出した。その受容の特徴は1930年代までは、西洋の知識人たちによる中国の伝統的な芸術文化の理解に日本における「古渡」「新渡」という二つの大きな流れの中国絵画蒐集の審美意識をめぐる著作からの影響が強く存在していることである。特にビニヨンは岡倉天心や瀧精一ら日本人美術学者による出版物や、渡英した日本人芸術家との人的交流を通して中国絵画を理解してきた。その結果、彼の中国絵画の解釈は「古渡」的な、日本人の美意識に大きく左右されるものとあった。ビニヨンと異なり、ウェイリーは中国語が堪能であるので、徐志摩、胡適のような中国人学者と親密な交流があった。そのため、ウェイリーは文人画に関する日中の認識の差異も明確に意識していた。すなわち、ウェイリーのような中国芸術と直接的に触れえた東洋学者たちによって欧米人の中国芸術研究の視点はロンドン国際展を機に日本よりの視点から中国よりの視点へと移行していく。このロンドン国際展の開催によって、英国知識人たちが中国文化に対しての新たな理解を示したことを著者は強調している。

本書の第Ⅱ部では、ロンドン国際展の成功に貢献した中国知識人たちの紹介を行っている。著者は、政府側、民間側二つの角度から中国側の動きを追っている。政府側について、著者は、南京国民政府を代表した二人の駐英大使、郭泰祺と鄭天錫を取り上げている。1935年に中英の外交関係は公使から大使に昇進したことによって、郭泰祺は南京国民政府の初代の駐英国大使に昇格した。ロンドン国際展の開催をめぐって、彼は英国を訪れた中国人芸術家を積極的に支援することを表明した一方で、彼は英国の外務省へ中英共催を提案した。本書はこの共催へ向けての文物の保険問題、運送方法、選考方

法などにまつわる具体的な交渉プロセスを明らかにしている。鄭天錫は、ロンドン国際展開催時に特別代表として英国に赴任した人物である。彼は英国に留学した経験を持ち、英国の王室とも貴族とも友好な関係を持っていた。さらに、鄭は英国人たちに向けた中国の歴史・芸術・文化についての講演会を行い、ヨーロッパ各国の政界要人や上流階級の貴族に中国の文物を解説するなど活躍していた。また、劇作家の熊式一と書画家の蔣彝は民間の知識人として中国の芸術を表現するために英国で各自の領域で活動していた。彼らは英国で中国の伝統的な劇作の演出と書画展示などの活動を通して、ロンドン国際展開催前後の英国知識人の正しい中国理解に積極的な影響を与えたのである。第Ⅱ部の最後では、ロンドン国際展に関する英文雑誌である『中国評論週報』グループの活動を主に紹介がなされている。そのグループの知識人たちは、ロンドン国際展と繋がりを持っていたのである。

本書の第Ⅲ部では、著者は林語堂を中心人物として彼の国内外での文学、文化に関する活動が論じられている。著者は林語堂に非常に高い評価を与え、「林語堂は国際的な知性と教養を兼ね備えた、近代中国が生んだ珍しい文化人である」とコメントしている(282頁)。林語堂がロンドン国際展に果たした役割や彼とバック夫妻の関係を明らかにするため、まず、著者は林語堂の国内での英文執筆活動に焦点を当てる。前半では、著者は英文雑誌『中国評論週報』を研究資料とし、林語堂のこの雑誌での編集や寄稿状況について主に分析している。さらに後半では、林語堂がバック夫妻と出会った経緯や、彼の最初の英語著作『吾国と吾民』の誕生とそれに関する評価を主に叙述している。次いで林語堂の渡米後におけるバック夫妻との交友関係を中心として、林語堂とアメリカの文化界との知的な交流について検討している。そして林語堂の渡米後の「東西協会」との関係、および『アジア』雑誌上の文筆活動に焦点を当て、著者は、「東西協会」で林語堂が主導する文化や社会の活動、および『アジア』雑誌での執筆と編集の状況を通じて、林語堂の渡米後の執筆、文化活動の分析を行っている。

第Ⅲ部の後半では、『生活の芸術』という著作を中心に、林語堂が明末清初の文人の性霊、ユーモア、余暇などの概念をどのように解釈したのかについて叙述がなされている。著者は、第二次世界大戦中の英語圏の読者がなぜこ

の本を熱烈に受け入れ、実際にどのように読んだのかという2つの問題を中心として考察している。また、著者は『吾国と吾民』、『生活の芸術』に続く、林語堂の「中国表象」の三部作としての最終作『北京好日』を紹介している。この小説では、林語堂は以前のように明末清初の中国趣味を紹介するだけでなく、現代社会の中国人の生活もリアルに描写している。著者は、中国古典小説『紅樓夢』との比較を通じて、この小説の短所を論じたが、この小説の創作背景と創作意図を全面的に分析した上で、英語圏の書評と竹内好の評価についても触れている。著者は林語堂の作品が欧米社会で大きな成功を収めた理由は、中日戦争という歴史的な背景だけでなく、政治、外交、文化、歴史にまたがる多層的な要因にあると指摘している。

3. 本書の成果と課題

評者は読了後、本書が明らかにした文化外交という概念、およびロンドン国際展の開催と中国芸術との関係の叙述に深い感銘を受けた。1930年代の中華民国の歴史を提起すれば、最初に頭に浮かび上がるのは侵略と植民化の暗い屈辱的な事実であろう。また、不平等条約と租界などの印象は根強いもので、中国の学界では南京国民政府の外交方面の努力と実績は軽視または無視されることが少なくなかった。しかし、著者は、ロンドン国際展の開催に即して、南京国民政府の外交的な努力や貢献を好意的に肯定した。文化外交という新たな概念から南京国民政府の功績を捉えたことは、本書の一つの特徴だと評者は考えている。

著者は、政治と美術を巧みに結びつけ、南京国民政府が国際展覧会を通して中国の芸術と美意識を世界に発信し、日本が主導した「満州事件」に対抗するために戦略的に国際的な支援を求めたことを繰り返して強調している。この目的を達成するために、南京国民政府は学者や芸術家たちによって、安全が保証されないまま故宮文物を海外に持ち出そうとする政府の方針を批判する国内の反対世論の「プレッシャー」に対抗して、中国古代皇帝文明の代表と思われた故宮から貴重な文物を提供する覚悟も示していた。著者は、英国と中国国内の知識人が積極的に英語で執筆し、欧米の文化界に中国の芸術や文化を紹介していたことも大幅な紙幅を使って描写している。これらの行

動を組み合わせ、著者は 1930 年代の中国の芸術交流史の知られざる側面を再現しようとしており、これも本書の特徴と言えるだろう。

その他、中国人である著者は独力で英語と日本語の文献を調査し、同時代の英国の東洋学者や日本の学者の中国芸術の研究状況を解説し評価を行っている。また、著者は宋代から清代までの大量の書画芸術品を取り上げて紹介している。そして、最後の『北京好日』と『紅樓夢』の文学作品の対比分析から理解することができるのは、著者は日本語と英語に堪能であるだけでなく、書画と文学などの中国伝統文化にも深い教養を持っていることである。本書は著者ならではの中国芸術についての紹介書となっている。

第二次世界大戦後の米ソ冷戦の時代を通じて、軍力だけではなく、ソフトパワーという文化の力の重要性が加速度的に認識されるようになった。特に 21 世紀の中国においては急速的な経済成長の過程で、「文化輸出」、「文化侵入」などの言葉も流行っている。「文化輸出」という言葉が指すのは、自国の文化を他国に伝えることである。これは文化の力を通して、国際的な地位と自国の影響力を向上させるということである。「文化侵入」という言葉が指すのは、他国の文化が自国に伝来されることを通して、国民の思想と認識を「悪い」方向へ変えることである。もちろん、21 世紀の国際化された世界においては国と国の文化交流は避けられない状況である。このグローバルの時代に、いかに文化交流のバランスを見出すかということは今後考察されるべき問題であろう。

管見の限り、本書に対する書評は 4 編発表されているが、注目されるのは掲載雑誌の専門分野がかなり異なることである¹⁾。いうまでもなく、『中国 21』と『中国研究月報』は中国を中心とした学術雑誌であり、『西洋史学』の説明は不要であろう。そして『比較文学研究』は、東大比較文学会の機関誌として創刊された雑誌である。このような特殊な現象は、本書の構成の多様な価値が広く学界で肯定されたことを表していよう。その意味でも、本書は日本語で書かれた中国芸術を理解する道への最も重要な扉だと言っても過言ではないだろう。

最後に今後の課題について二点提出したいと思う。一つは、本書で西洋の知識人は「日本の眼」から中国の伝統的芸術文化を理解したという事実を指

摘している。ならば逆に考えられるのは中国の知識人は西洋の芸術文化を理解する過程で日本と関わっているのか、関わっているとすればどのように影響されたのか、という問題である。もう一つは、当時の南京国民政府の対立面と言える共産党あるいは国民党左派の勢力はどのようにロンドン国際展を評価したのか、という問いである。とはいえ、これらの研究テーマは本書に学びながら、読者たちが考えてゆくべき今後の課題であると思う。

(名古屋大学出版会、2018年6月刊、590頁)

注

¹ 藤原貞朗の書評は『中国 21』（愛知大学現代中国学会）51号、2019年に、中村みどりの書評は『中国研究月報』865号、2020年に、西槇偉の書評は『比較文学研究』（東大比較文学會）106号、2020年に、橋本順光の書評は『西洋史学』（日本西洋史学会）272号、2021年に掲載された。